慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アジア太平洋戦争期の戦争遺跡における公共考古学的研究
Sub Title	Public archaeological study at war-related sites during the Asia-Pacific War era
Author	安藤, 広道(Ando, Hiromichi)
Publisher	
Publication year	2024
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究の主たるフィールドは、アジア太平洋戦争末期の特攻作戦を指揮した連合艦隊司令部地下壕と第五航空艦隊司令部壕が存在する、神奈川県横浜市慶應義塾大学日吉キャンパス一帯と鹿児島県鹿屋市一帯である。当初計画では、多様な立場の方々からなる研究協力者とともに、戦争遺跡の調査や研究集会等を行う予定であったが、コロナ禍により2022年度前半まで実施不可能となった。そのため、これまでの研究代表者、研究協力者の調査・研究の成果を中心に多様な情報を集積してWeb上の地図に展開する地図型アーカイブを作成・公開することにし、これを基点に戦争をめぐる対話のネットワークの拡張を目指した公共考古学的活動を行った。 The main field of this study is the area surrounding the Keio University Hiyoshi Campus in Yokohama City, Kanagawa Prefecture, and the area around Kanoya City in Kagoshima Prefecture, where the tunnel bunkers of the Combined Fleet Headquarters and the Fifth Air Fleet Headquarters, which commanded the kamikaze operations in the late stages of the Asia-Pacific War, are located. Initially, the plan was to conduct surveys of war-related sites, research meeting, and so on, with research collaborators from various backgrounds, but this became impossible until the first half of the fiscal year 2022 due to the COVID-19 pandemic. Therefore, it was decided to construct and publish a map-based archive on the web which could archive the results of research and investigations by the principal investigator and research collaborators and other information, and to conduct public archaeological activities aimed at expanding networks of dialogue surrounding war based on this archive.
Notes	研究種目 : 基盤研究 (C) (一般) 研究期間 : 2020 ~ 2023 課題番号 : 20K01078 研究分野 : 考古学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_20K01078seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１０７８

研究課題名（和文）アジア太平洋戦争期の戦争遺跡における公共考古学的研究

研究課題名（英文）Public Archaeological Study at War-Related Sites during the Asia-Pacific War Era

研究代表者
安藤　広道（Ando, Hiromichi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：８０３１１１５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の主たるフィールドは、アジア太平洋戦争末期の特攻作戦を指揮した連合艦隊司令部地下壕と第五航空艦隊司令部壕が存在する、神奈川県横浜市慶應義塾大学日吉キャンパス一帯と鹿児島県鹿屋市一帯である。当初計画では、多様な立場の方々からなる研究協力者とともに、戦争遺跡の調査や研究集会等を行う予定であったが、コロナ禍により2022年度前半まで実施不可能となった。そのため、これまでの研究代表者、研究協力者の調査・研究の成果を中心に多様な情報を集積してWeb上の地図に展開する地図型アーカイブを作成・公開することにし、これを基点に戦争をめぐる対話のネットワークの拡張を目指した公共考古学的活動を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の意義は大きくふたつにまとめられる。ひとつは、当初計画の代替案として取り組んだ地図型アーカイブの作成である。これにより、研究者だけでなくさまざまな立場の人びとによる調査研究成果や意見などを地図上に集積して公開することが、遺跡をはじめとする歴史に関わる場を、人々の対話のネットワークの基点にしていくことの一助になることを示し得たと考えている。
　もうひとつはアジア太平洋戦争期の戦争遺跡を対象に、多様な立場の人びとが参加して行った公共考古学的調査の成果である。戦争遺跡に限らず、歴史に関わる場所の調査研究に、研究者以外の人びとも参加し得ること、そして参加することの意義の一端を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：The main field of this study is the area surrounding the Keio University Hiyoshi Campus in Yokohama City, Kanagawa Prefecture, and the area around Kanoya City in Kagoshima Prefecture, where the tunnel bunkers of the Combined Fleet Headquarters and the Fifth Air Fleet Headquarters, which commanded the kamikaze operations in the late stages of the Asia-Pacific War, are located. Initially, the plan was to conduct surveys of war-related sites, research meeting, and so on, with research collaborators from various backgrounds, but this became impossible until the first half of the fiscal year 2022 due to the COVID-19 pandemic. Therefore, it was decided to construct and publish a map-based archive on the web which could archive the results of research and investigations by the principal investigator and research collaborators and other information, and to conduct public archaeological activities aimed at expanding networks of dialogue surrounding war based on this archive.

研究分野：考古学

キーワード：戦争遺跡　アジア太平洋戦争　沖縄戦　特攻　近現代考古学　戦跡考古学　公共考古学　地図型アーカイブ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

アジア太平洋戦争期の戦争遺跡（以下、戦争遺跡）の調査・研究の必要性が主張され始めたのは、四半世紀以上前のことである。しかし日本考古学において、戦争遺跡の調査・研究の方法、及びその公共的意義をめぐる議論は、今日に至ってもなお低調と言わざるを得ない。

これに対し､公共圏における戦争遺跡への関心は､戦争体験者の減少とともに高くなっている。すでに長い歴史をもつ市民団体の活動に加え、近年では、自治体主催のイベントや地域博物館の企画展等で取り上げられることも多くなってきた。また自治体が、戦争遺跡を観光資源として活用する事例も増えている。

一方で、こうした公共圏における関心の高まりとともに、かねてより続いているアジア太平洋戦争の評価をめぐる対立と排除の構造が、戦争遺跡をめぐる活動や言説にも影響を及ぼすという問題が見られるようになってきた。実際に自治体による戦争遺跡についての説明から特定の表現が削除されるといった事例も散見され、戦争遺跡そのものが対立や排除の場となる危険性が見え始めている。

こうした問題に対し、研究代表者は、日本考古学が今のところ十分にコミットすることができておらず、公共圏における学としての存在意義を示せていないと考えてきた。本研究の企図はこうした問題に取り組むことにあった。

２．研究の目的

研究代表者は、過去 2 回の科研費による研究（23320172「東京湾西岸地域における旧帝国海軍軍事遺跡の基礎的研究」、16K03163「軍事遺跡の教育・学習資源化をめぐる実践的研究」）を通して、以上のような問題の析出とその背景をめぐる考察を進めてきた。そのうえで、今後考古学がこれらの問題に向き合うためには、戦争遺跡を対象とする考古学的な調査とその成果の公開だけでなく、歴史のもつ多様性やプラクティカルな側面に積極的に目を向け、遺跡を多様な意見同士が出会い対話する場として位置付けることを目指す、公共考古学的な取り組みが不可欠になると主張してきた。

本研究は、このような問題意識に基づき、これまでに蓄積してきた戦争遺跡の考古学的調査の成果を中心に、戦争遺跡に関心をもつさまざまな立場の人々が参加する、戦争遺跡や戦争体験の共同調査、及び研究会、ワークショップ、講演会等の実施を通して、戦争遺跡を対話の場としていくことの意義と可能性を考察するとともに、今後の課題を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

残念ながら本研究の開始年度（2020 年）がコロナ禍の始まりと重なってしまい、かつ 2020 年度末の時点でもその終息の見通しが立っていなかったことから、2021 年度の初頭において、申請時に計画していた共同調査、研究会、ワークショップ、講演会等の対面的イベント中心の研究方法を、抜本的に変更することにした。

これらの活動に代わる公共考古学的な取り組みとして考案したのが、地図型アーカイブとも言うべき Web サイトの作成と公開である。これは、電子地図上に遺跡を含む特定の地点に関連するさまざまな情報を集積し公開するもので、本研究ではこれを「アーカイブマップ」と呼ぶことにした。具体的には、研究代表者が調査してきた地域を対象に、研究代表者のこれまでの調査・研究の成果をはじめ、他の研究者、郷土史家、市民、自治体、新聞社等に協力を呼びかけて提供していただいた戦争遺跡や体験談等の調査成果、さらには Web サイトや SNS 等でさまざまな組織や個人が発信している情報も可能な限り収集し、地図上に貼り付けていくというものである。

アーカイブマップの作成と利用を通し、作成者も利用者も、特定の場所に関わる、多様な視点からの調査成果や意見を目にすることになる。それによって、戦争遺跡がさまざまな視点から多様に語り得る場であることを示していくことが、アーカイブマップの狙いである。

なお、研究期間 3 年めの 2022 年度後半から、少しずつ戦争遺跡の調査や講演会等の実施が可能になってきたため、これらを再開するとともに、研究期間を 2023 年度まで 1 年延長した。そして、それぞれの成果についても、アーカイブマップを通して公開することにした。

４．研究成果

(1)アーカイブマップの作成と公開

アーカイブマップの作成にあたっては、株式会社 Stroly が無料で提供している Web アプリケーション「Stroly」をプラットフォームにすることにした。「Stroly」は、自作の地図をアップできる GPS と連動したマップメディアで、地図上に「Spot」と呼ばれるポイントを設定し、各「Spot」に紐づけられたポップアップ画面に、「Spot」に関するテキスト、画像、映像等を表示できるシステムである。「Spot」及びポップアップ画面は、HTMI により比較的自由にデザインできるため、アーカイブマップの作成に必要な機能はほぼ揃っていると考えた。

アーカイブマップの作成と公開は、大きく二つの段階に分けて実施した。一段階めは、試作版の作成と公開で、「Stroly」で可能なことの範囲と、アーカイブマップの公共考古学的な可能性

を確認するためのものと位置付けた。
第一段階の対象エリアには、神奈川県座間市の芹沢公園一帯を選んだ。芹沢公園は、ほぼ全域が高座海軍工廠第三工場区と重なっており、研究代表者が前回の科研費研究（16K03163）において調査した芹沢（中丸）地下壕と呼ばれる地下工場跡が存在する。試作版を作成するには適度な範囲であり、加えて座間市教育委員会からも協力が得られたため、芹沢公園を中心とする東西南北約１km 四方の地図を作成し、研究代表者の調査成果を中心に、座間市や市民が発信している情報などを集積した。これを「高座海軍工廠第三工場区アーカイブマップ」と名づけて、2022 年 3 月 22 日に一般公開した（https://stroly.com/viewer/1647779744）。
第二段階では、第一段階で得られたノウハウを用いて、アーカイブマップの対象範囲を大幅に拡張し、かつより複雑な構造をもつものを作成することにした。対象エリアは、鹿児島県大隅半島の肝属地域、東西約 44km×南北約 31km の範囲である。対象エリアが広域に及ぶため、この地域に存在した３つの海軍航空基地、鹿屋基地、笠ノ原基地、串良基地のアーカイブマップをそれぞれ別に作成し、肝属地域全体のアーカイブマップから入ることができるようにした。また、地図上に貼り付ける情報も大幅に増やし、300 以上の「Spot」を設定しただけでなく、それぞれに多くの情報を盛り込んだ。
こちらは「鹿屋戦争アーカイブマップ」と名づけ、2023 年 3 月 18 日に一般公開した（https://stroly.com/viewer/1638713501）。公開に当たっては、作成に協力していただいた南日本新聞が、紙面での紹介とともに同社のホームページにリンクを設定してくれることになった。また、同年 8 月 14 日には、読売新聞の１面・３面にて、アーカイブマップを含む鹿屋市一帯における本研究の取り組みが大きく紹介された。「鹿屋戦争アーカイブマップ」の公開後１年間の利用者は延べ 4037 人であった。
アーカイブマップの作成と公開は、コロナ禍による代替プロジェクトとして考案したものであったが、その作成にあたって多くの組織や個人から協力を得ることができ、また公開後も公共圏から多くの関心が寄せられることになった。アーカイブマップの作成と利用によって、公共考古学的実践における地図型アーカイブの有効性を示すことができた点は、本研究の非常に大きな成果になったと考えている。
(2)戦争遺跡の調査成果
鹿児島県鹿屋市一帯の現地調査再開することができたのは、2022 年度後半からであり、再開後も長期に及ぶ調査、及び体験者の聞き取り調査は不可能な状態であった。そのため、調査対象を戦争遺跡に絞り、地理情報システムを用いて無蓋掩体壕等の大型の遺構の探索を行ったうえで、それらを鹿屋市及び鹿屋市平和学習ガイド・調査員連絡会の協力のもとで現地確認するという、変則的な調査方法を取ることにした。とはいえ、この調査により、鹿屋基地周辺において５基の無蓋掩体壕の残存を確認することができたことは、公共考古学的活動を進めるうえで、きわめて大きな成果となった。ほかにも、工事中に発見された遺構などを、現地調査を行うことなく、アーカイブマップ作成用に収集していた空中写真等を駆使して同定するという調査も行い、こちらでも第 22 海軍航空廠の飛行機倉庫の基礎の確認という、大きな成果を得ることができた。これらの成果も南日本新聞で紹介され、併せてアーカイブマップでも公開したため、一帯の戦争遺跡の存在とその活用に対する関心を、ある程度喚起できたものと考えている。
神奈川県横浜市慶應義塾大学日吉キャンパス内の連合艦隊司令部地下壕では、2021 年度後半から一部対面授業が再開されたため、大学生を対象とした地下壕見学とアンケート調査を再開した。最終年度の 2023 年までにアンケート回答者が 100 名を超えたため、回答の集計と分析を行うことにした。その結果、学生たちが地下壕内の物的痕跡に基づく説明に強い関心を示していたこと、物的痕跡に関心を示した学生が、特攻作戦や戦争の恐ろしさや悲しさ、そしてこの地で歴史を学ぶ意義についても言及していることなどが明らかとなり、考古学的調査の成果の活用方法に対する、ひとつの有効な枠組みを提示できたと考えている。
(3)講演や書籍等による研究成果のアウトプット
2022 年度後半からは、再び研究代表者のもとに講演等の依頼が届くようになったため、これを研究成果のアウトプットの機会として積極的に活用することにした。2023 年 3 月には鹿児島県鹿屋市で、10 月には秋田県北秋田市、11 月には長野県塩尻市で、本研究の研究成果を踏まえた講演を行った。加えて、11 月には鹿屋市で開催された「第 10 回空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会」にて研究成果の発表を行ったほか、翌年 2 月には島根大学主催の「シンポジウム 戦争遺跡の保存と活用」にて、「戦争遺跡のポテンシャルーその可能性の広がりー」と題する、本研究の成果を踏まえた基調講演を行った。
このほか、2023 年 8 月刊行の『日吉台地下壕－大学と戦争－』（高文研）に、鹿屋市一帯のこれまでの研究成果をまとめた「日吉、鹿屋、そして沖縄」を執筆し、11 月刊行の『文化遺産の世界』Vol.42（NPO 法人 文化遺産の世界）にて、公共考古学の理論的枠組みをまとめた「パブリックヘリテージとしての戦争遺跡」を発表した。また、2024 年 2 月には、上記の 4 ヶ年の研究成果をまとめた報告書『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究Ⅲ』を刊行した。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

1．著者名 安藤広道	4．巻 42
2．論文標題 パブリックヘリテージとしての戦争遺跡	5．発行年 2023年
3．雑誌名 文化遺産の世界	6．最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

1．著者名 阿久澤武史、都倉武之、亀岡敦子、安藤広道	4．発行年 2023年
2．出版社 株式会社高文研	5．総ページ数 222
3．書名 日吉台地下壕：大学と戦争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

鹿屋戦争アーカイブMap
https://stroly.com/viewer/1638713501
海軍鹿屋航空基地アーカイブMap
https://stroly.com/viewer/1638769016
海軍串良航空基地アーカイブMap
https://stroly.com/viewer/1638273582
海軍笠ノ原航空基地アーカイブMap
https://stroly.com/viewer/1640072047
高座海軍工廠第三工場区アーカイブMap（試作版）
https://stroly.com/viewer/1647779744/

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関